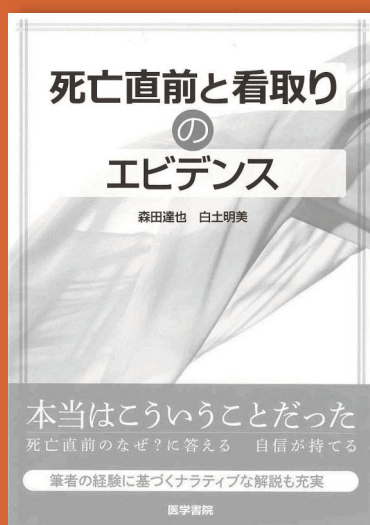


書評

死亡直前と看取りの
エビデンス

- 著 森田達也／白戸明美
- 定価 本体 3000 円＋税
- 医学書院

評者

京都大学大学院医学研究科
人間健康科学系専攻 教授
田村恵子

終末期ケアのエビデンスに
著者の臨床経験を交えて解説した
頼りになる 1 冊

緩和ケアの臨床で向き合うのは苦痛を体験して苦悩する患者や家族であり、その苦悩は客観的に数値化して捉えることは難しく、ケアはそれぞれの医療者の経験則によって実践されてきた。

しかし、近年、人が死亡に至るまでの過程を対象とした実証研究が進んでおり、死亡直前の医学的問題や看取りに関する科学的根拠（エビデンス）も蓄積されてきている。こうした現状を鑑み、著者はエビデンスを積極的に活かして死亡直前や看取りの時期のケアを提供することが必要であると考え、本書が誕生した。

まえがきにも記されているように本書は、人が死にゆく過程と病態について、死亡直前に生じる医学的問題とそのケアについてのエビデンスを解説しているが、そこに著者の経験が著者のイラストとともに絶妙な口調で書き加えられており、一味違う風味を醸し出している。

看護師の視点から考える
本書の活用法

本書の活用法について看護師の視点から紹介してみたい。

例えば、死が週単位で近づいてくる中で、輸液をいつまでどの程度行うかは臨床ではよく遭遇する問題である。「何も食べられないのだから『点滴くらいはしてほしい』」という患者・家族からの訴えはよく耳にするものであり、その対応として「点滴くらいしておこう」という医師の指示もよく目にするものである。多くの看護師は「本当に必要なの？ 負担になるだけじゃないの？」と疑問を感じて、これでいいのかと悩む。

そこで本書を紐解いてみると、「余命が週単位の患者を対象とした場合は、輸液をルーチンに行うことは患者の自覚できる症状や生命予後には影響しない」とのエビデンスが提示されている。しかし、同時に「輸液は医学的な意味だけを

持っているものでなく、患者・家族によってその考えが異なる」との研究結果も示されている。

これらのことから、著者は臨床でのボトムラインとして、死亡直前の患者に少量（500～1000 mL/日）の輸液を行うか否かの判断には、症状をどうするかということよりも、患者・家族の価値観を重視する必要があると述べている。

この内容から、看護師は何を大切にしていればよいか、そのポイントを学ぶことができ、看護師にとって大切なことは、1000 mL/日の処方箋を見ながら、この点滴は多すぎるのではないかと悩むことではなく、患者や家族の輸液についての思いを丁寧に聴き、その意味に配慮を払うことなのだ気づくことができる。その結果、患者や家族の思いを聴くということを主目的として、ベッドサイドへ向かうことができるようになる。

終末期ケアに悩む看護師に
自信を持たせてくれる書

そのほかにも、日ごとにやせ衰えていく患者の腕にマンシエットを巻きながら、本当にこれで死亡時期を予測することが可能なのかと疑問を感じたとき、家族への看取りの説明をどうすればいいのだろうかと悩んだとき、死亡直前の呼吸困難の緩和やせん妄の対応に困ったとき……などなど、「これってどうすることがよいのだろう」という悩みに、エビデンスと著者の臨床経験に基づいた考え方が提示されている。おそらく多くの看護師は、もやもやが少しずつ晴れていくことを実感するだろう。

死にゆく患者と家族に適切なケアを行いたいと願っている看護師の皆さんの側に本書を置いていただくことで、その悩みを解決しつつ、自信を持ってケアを実践できること間違いなしである。